論理・倫理・死　～野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』第 13 章「死について、幸福について」に対する若干のコメント

2023 年 9 月 28 日　宮国淳
http://miya.aki.gs/mblog/

本稿は野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』(筑摩書房、2006 年) 第 13 章「死について、幸福について」(282～307 ページ) に関していくつか簡単にコメントしたものである。

正直なところ、ウィトゲンシュタインに「*幸福に生きよ！*」(野矢、307 ページ：『草稿』1916 年 7 月 8 日からの引用) と言われたところで、「余計なお世話だよ！」といわざるをえない・・・”哲学的言葉遊び”に深入りするつもりはない。

本文中の引用部分は『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』からのものである。

＜目次＞　()内はページ

1．ウィトゲンシュタインの誤った論理観・経験観 (1)
2．倫理は世界の内にある (3)
3．私の死がどのようなものかは因果的に推測されるのみ (4)

1．ウィトゲンシュタインの誤った論理観・経験観

これまでに何度も説明してきたが、以下の論理観・経験観は根本的に誤っていると言わざるをえない。

> *論理は語りえない。世界の事実を経験するようにして論理を経験することはできない。しかし、現実の全体を要素的な事態へと分解するには複合命題と要素命題の間に成り立つ論理的秩序が了解されていなければならない。論理を欠いた経験は、ただ現実の刺激がその現実世界全体として未分節のままに、つまりないが何だか分からないままにわれわれを促し、何がなんだか分からないままに反応するというにすぎず、それゆえそれはもはや「経験」と呼ばれる資格を失う。したがって、論理は経験を成立させるため*

に要請されるという意味で超越論的である。（野矢、288 ページ）

・・・具体的には次のようなことである

① 「現実の全体を要素的な事態へと分解する」という考え方が誤っている。事実として、現実は全体として現れない。全体としての現実は、その都度その都度個別に現れる事実を因果的に繋ぎ合わせることで導かれる。しかしそれでも全体というものはあくまで想定されている・構築されているものであって、個別の具体的経験として現れることはない。
② 私たちが個別の具体的経験をつなぎ合わせたり全体像を描いたりできるのは、そこに言葉の媒介があるからである。言葉と対象としての事実が繋がり合う。そしてそれにより対象（事実）と対象（事実）との関係構築（つまり因果関係構築）がより明確にできるようになっているのである。
③ 言葉の意味としての対象は、あくまで事実（具体的経験）として現れる。それも現実である。
④ 言葉と対象としての事実が繋がり合い、さらに事実どうしの因果的繋がり合いが導かれることで、現実世界の認識が導かれる。論理はその現実世界を分析する中で見いだされるものであって、論理が経験に先立つことはない。そして論理の正しさは現実世界のあり方により確かめられるものなのである。

既に以下のレポートでも触れたが、

主体否定と思考 ～野矢茂樹著『ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』第 10～11 章の分析

http://miya.aki.gs/miya/miya_report42.pdf

『探求』において、上記の論理観は全く否定されている（野矢氏の説明によれば）。

『論考』における答えは、もちろん、「世界にア・プリオリな秩序は存在する」というものであった。では、『探求』の答えはどうか。答えは微妙にならざるをえないが、少なくとも『論考』のような意味において、すなわち私が「強いア・プリオリ」と呼んだ意味において、論理がア・プリオリな秩序として成立することは否定される。論理は、世界のあり方に、人間という生物のあり方に、われわれの経験のあり方に、依存したものでなければならない。少しフライング気味に言わせてもらおう。『論考』においては論理が世界と人間の可能性を限定した。だが、『探求』においてはまったく逆に、世界と人間の限界こそが論理を限定するのである。（野矢、361 ページ）

いずれにせよ、論理は「語りえない」ものではない。具体的事例を挙げた上でその正しさを検証することができるものである。

2．倫理は世界の内にある

野矢氏によると、永井氏は”*倫理は「世界の外にあるがゆえに語りえない」*”（野矢、289ページ）と主張されているそうである。本当にそうだろうか？

ウィトゲンシュタインの「*倫理と美はひとつである*」(野矢、289ページ：『論理哲学論考』からの引用）もとくに根拠があるわけでもない。無視してもよかろう。「*永遠の相のもとに世界を捉える*」(野矢、291ページ：『論理哲学論考』からの引用）といったところで、そもそも「永遠」とは何か、という問題になる。世界の外で“語れない”ならばどうとでも言えるというところだろうか？ いくら論じたところで屁理屈になるだけである。

ただ私から言わせてもらえば、倫理は世界の内にあると言える。実際語れるものである。互いに賛同できない可能性があるということは「語れない」ということではない。

以下のレポートが参考になるであろうか。価値や理念に関するヴェーバー（そして西研氏）の誤解について説明するものである。

価値・理念について議論するとはどういうことなのか
～「なんのための」社会学か？ の批判的検証を中心に
http://miya.aki.gs/miya/shakaigaku1.pdf

倫理は決して超越論的なものではない。

> *善悪、価値、幸福と不幸、あるいは美、これらは世界の中の事実として世界を構成する要素になっているわけではない。*（野矢、307ページ）

・・・本当にそうだろうか？ 「世界」をどのように捉えるのか、という問題はあるのだが、有意味性を担保できる言語表現の範囲として捉えるのであれば（真偽を明確に判定できない場合も多いのだが言葉の有意味性は確保されている）、世界の範囲内にあるものなのである。

「美」がいかなるものか言葉では言い尽くせないではないか、と思うかもしれない。もしそうならば、そこにある草花について、それを言葉だけで”すべて”あますことなく説明しろ、

と言われても無理なことである。つまり日常的な言語の問題と変わらない。

そうではなく、特定の状況や事物に対し「美しい」と言語表現した事実、そのときの「美しい」という言葉はその状況・事物、場合によってはその時に現れた情動的感覚なども含め、「美しい」という言葉の対象としての事実が実際に現れているのである。

善悪、価値、幸福と不幸、美、というものに関して、

① 「善悪そのもの」「価値そのもの」「幸福・不幸そのもの」「美そのもの」という事実・事態が現れることはない。しかし「どういう具体的状況を善と呼ぶのか」「どういう状況を悪と呼ぶのか」、「どういう状況を幸福と呼ぶのか」「どういう状況を不幸と呼ぶのか」という問いかけは可能なのである。(もちろん答えることも可能)

② しかし世界中の人々全員が賛同する一つの答えというものは出しにくい。一人の人においてもその時その時で変化しうる。お互いに話ながら共通点を見出すこともある程度はできるが、どうしても譲れない部分が出て来ることもある。

ただ、いずれにせよそれぞれの人において、「善悪」「価値」「幸福・不幸」「美」というものの対象（物・事象）というものを見出す、指し示すことは可能なのである。

・・・そんなところであろうか。価値理念の議論に関しては以下のレポートも参考になるかもしれない。

「イデア」こそが「概念の実体化の錯誤」そのものである ～竹田青嗣著『プラトン入門』検証
http://miya.aki.gs/miya/miya_report11.pdf

3．私の死がどのようなものかは因果的に推測されるのみ

死は人生のできごとではない。ひとは死を体験しない。(野矢、294 ページ：『論理哲学論考』からの引用)

・・・私自身の死は今のところ体験していない。そのうち体験するかもしれない。死ぬ間際、死ぬ瞬間について死を体験したと言えるのかどうか、そのあたりは解釈の違いであってどうとでも言えそうである。(議論すること自体が時間の無駄のように思える)

永遠を時間的な永続としてではなく、無時間性と解するならば、現在に生きる者は永遠に生きるのである。(野矢、294 ページ：『論理哲学論考』からの引用)

・・・このあたりは単なる言葉の遊びでしかなく、“哲学”として真面目に取り組むようなものではなかろう。

ただ言えることは、今生きている私にとって自らの死はまだ体験したことがない、ということ、そして他者の死は体験したことがあるということである。直接体験する場合や他者の話や小説、映像作品などにより間接的に知る場合もあろう。

野矢氏も

> *死が私の人生のできごとではないというのはあくまでも私の死についてであり、他人の死ではない。他人の死はもう死んでいる人であれば現実の事実として、まだ生きている人であれば可能的な事実として、論理空間に含まれている。*（野矢、295 ページ）

・・・と述べられている。

しかし可能的な事実、というのであれば私の死についても同様である。論理空間に含まれているのは私も他人も同じだからである。（私も他者も論理空間の中にいる。つまりそこにおいて私も他者も同じ人間として存在していると思っているのである。私がこのように様々な知覚経験を受け取っている、そして同じように他者も様々な知覚経験を独自に受け取っているのであろう、という確信なのである。）

論理空間と私との関係を見誤っているからウィトゲンシュタインのような見解に至ってしまうのである。

問題は、死ぬ間際、死んだ瞬間、死んだ後、私自身はどう感じるのか、何かしらの具体的な知覚経験を受け取ることがあるのか、死んだ後にも何かしらの具体的知覚経験がありうるのかという話である。俗な言い方をすれば意識があるのかなくなるのか、ということである。ひょっとしたら身体的に死んだと言われる状態であっても、夢でもなんでも何らかの知覚経験が生じていたら・・・？

これについて、私たちは死んだ人と話をすることができないとか、死んだ人は体や脳が機能していないのだからもはや何も受け取ってはいないであろうというふうな因果的な推論をするしかない、そして今のところそれを完全に確かめる術はない。ただそれだけの話である。

> *論理空間の中の私は大勢の中のひとりにすぎないが、この論理空間は多くの論理空間の中のひとつではない。私は私の論理空間以外の論理空間を考えることはできない。ここにこそ、私の独自性がある。私の独自性はけっして論理空間内部のものではなく、論理空間の成立にかかわる超越論的な独自性にほかならない。*（野矢、296 ページ）

・・・超越論的な私というものはない。具体的に経験した事実（当然言語も含まれる）の（因

果的）積み重ねから論理空間というものが形成されている。その中で「私」という（物理的）存在が認められ、そしてその「私」がそれらの具体的経験を受け取っていたのだ、と理解されるのである。論理空間における私と論理空間の外にいる私とが別々に存在しているわけではない。

まず見えているものがあり、それは「私が眼で見ていたものなのだ」という因果的理解、客観的理解が（理屈から言えば事後的に）なされる。まず現れる感覚があり、それは「私の体が感じているものなのだ」と理解されるのである。もちろん日常生活では、ただ私が見た、私が感じたと思うだけなのだが。もちろんその私も超越論的なものではなく、今ここに一つの物体として存在している、体や眼を持つ私なのである。

ウィトゲンシュタインは「*君は現実に眼を見ることはない*」「*視野におけるいかなるものからも、それが眼によって見られていることは推論されない*」（ウィトゲンシュタイン『論理哲学論考』116 ページ）としているが、間接的にならば目を見ることはできるし、目によって見られていることを因果的に理解することも可能である。

そして私が死んだら、それらの経験（経験の記憶やこれから体験する経験）も消えてしまうのではないだろうか、と推測しているのである。これまでの私たちの具体的経験から因果的に導かれた様々な知識（経験則）より、そのように推論されているのである。

ただ、実際に、本当にそうなのか確かめることもできないし、死んでしまったら、私が感じている感覚やら出来事を他者に伝えることもできない。

もし仮に身体とは別の魂というものが実際にあって、それが私という感覚をもたらしているのであったとしても、それは身体に魂という実在が（論理空間に）加わるだけであって、超越的な私というものが現れるわけでもない。

野矢氏は、

> *論理空間は操作と生（私の生）によって決定される*（野矢、226 ページ）

・・・と言われるが、厳密に言えば、「私の生」により“存在論的経験”（とは言うものの、単に“これまでの経験”のことなのであるが）が決定されるというよりも（これは事後的な因果分析による事実認識）、それら経験が生じていることが「私の生」の根拠・確証となっている。具体的経験がまず先にある。繰り返すが「私」「私の生」というものはそこから導かれる・根拠づけられるものであって（そして過去の経験の記憶は私の同一性をもたらすものであって）、（特に超越的な意味で）具体的経験の”前提”として「私」「私の生」があるのではない。